



TITLE:

リプライ

AUTHOR(S):

平野, 美佐; 西, 芳実; 王, 柳蘭; 星川, 圭介; 帯谷, 知可

CITATION:

平野, 美佐 ...[et al]. リプライ. CIAS discussion paper No.50 : 世界のジャ
スティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 49-51

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228622>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

み重ねがない世界に終わるのではないかという疑問が生じます。それで、グローバリゼーションに勝てるのかどうか分からない。ここでは、結局グローバリゼーションは、地域研究に正義の研究を求めるようになったのか。それだけ価値の対立が起っているのかを、皆さんにお聞きしたいと思いました。

次に、リスクに関して、やはり正当な評価をする必要がありますが、少ないリスクを扇動するバイアスと、実際にあるリスクを少なく言うバイアスがあります。これは非常に政治的だし、経済とか企業利益が関わっているので、現場にいる人間が本当にばらしてしまうと、立場が危なくなるような厳しい状況があります。そういったバイアスがかかるなかで、科学者が何をやっていくかということを考えていかなければならない。しかも将来のことなので、不確実性を回避できないため、正しい判断でも結果的に間違っているということが起こりうる難しい問題だと思っています。

まとめにならないまとめですが、あまりそれぞれの正義を主張しないほうが良いのではないかな。でも、そのためにこそ正義を研究する必要があるのだと思いました。最後にあまり正義を言わないことを考える上で、「過ぎたるは及ばざるがごとし」ではなく、「及ばざるは過ぎたるよりまされり」という家康公遺訓を引いて終わりにしたいと思います。これからこうしたことを議論ができれば良いと思います。ありがとうございました。

■ リブライ

平野美佐（京都大学大学院、アジア・アフリカ地域研究研究科）：

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。手短に、個別の質問だけお答えします。まず、河合先生の、バミレケの人たちが外からやって来たのかという質問ですが、彼らは国外から来たわけではないのですが、バミレケ・ランドからあちこち、カメルーン全国に移住しています。そういう意味ではおっしゃるように、都市ではバミレケの人びとは「よそ者」です。「商人のジレンマ」というのがありますが、商人は自分のコミュニティでは自由に商売ができない、儲けようと思うとコミュニティから嫌われる、というのがあります。そういう意味で、バミレケの人びとが本当の意味で商才を発揮できたのは、しがらみのない都市へ移住してからだと言えます。ですから、彼らは都市に空間移動するだけではなくて、農民

から商人へという社会移動をしました。そして、不動産などをどんどん地元の人たちから買い上げたりして嫌われるわけです。おっしゃるように、バミレケの人たちは、よそ者として嫌われつつ、しかしそれがあつた種のメリットとなつて、商売を進めてきたともいえるのです。

幡谷先生のご質問で、市場経済化してグローバル化がすすむなかで、バミレケの首長制社会がずっと維持されていくのかという問題ですが、私も同じような関心をもっております。ただ、今後数十年の間になくなるとは思われません。たとえば、バミレケはたくさん成功者が出ていますと申し上げましたが、彼らが村を重要だと思っている限りは、続くと思われまふ。昔は代替わりの行事なども含め、バミレケ社会では葬式や儀礼など、今ほど派手には行われていなかったといわれています。都市に移住する人たちが増え、経済力が増すほど、かつてなく派手になってきているのです。そういう意味では、今のバミレケ首長制社会は、これまでになく活気づいているといえます。ただ、それがかつてのものと同じではなくなっていることは確かです。また、都市移住民の子供、2世、3世、4世など都市で生まれ育つた若者たちにとって、故郷が遠い存在になりつつあるのも確かです。都市での同郷者の集まりに、いかに若者を引き寄せるのかは大きな課題です。再生産がうまくいかないと、やはりいつかは危機を迎えるのかもしれない。

西芳実（地域研）：

たくさん質問をいただいたので、できるだけ手短にお答えします。まず、河合先生からのお話で、2004年以降、インドネシアの災害対応にどんな変化があつたのかというご質問ですが、災害対策基本法などの制度化が進められたということに加えて、災害ボランティアに関する認識が非常に高ま



りました。災害が起こると被災地支援のために、被災した地域の外からいろんな地域の人たちが現地入りする。支援活動の中には、遺体の回収のような極めて精神的負担の大きいものも含まれていました。他地域からの災害ボランティアは、初期の救援活動に対して有効でした。しかも、ボランティアといってもそれに関わってお金動く、被災地支援活動は専門的職業としても成立するという認識も共有されるなかで、2004年はインドネシアにおけるボランティア元年となったと言われています。その後もインドネシアでは2006年中部ジャワ地震、2007年ベンクル地震、2009年西スマトラ地震というように、大きな災害が相次ぎました。そこから、インドネシアでは災害はいつでもどこでも起こりうるという認識が共有されました。その結果、たとえ災害の予知が難しかったとしても、事前に津波警報の知識の共有や、災害に対する心構えなどを深められるし、万一災害が起ってしまったときには、外から支援してもらえようという考えが広まりました。特に、外からの助け、外助が大事だという考え方が広く共有されるようになったことは、非常に大きいと思います

次に、2011年の東日本大震災との比較について、身元不明の遺体や、遺体もない行方不明者をどのように弔うのかという質問についてお話しします。アチェでは通常、イスラム教のやり方に従って弔うんですけれども、今回の災害では、イスラム教の通常の弔いの仕方ができませんでした。イスラム教では、24時間以内に遺体を埋葬して墓碑を立てますが、それがまったくできなかった。そのため新しい弔いのかたちというのが作られました。それが墓碑をつくらない集団埋葬地です。1ヵ所に5000体とか10000体の遺体が埋葬されていますが、墓碑はない。そういった集団埋葬地があちこちに作られました。遺族としては、自分の身内、家族たちがどこに埋まっているかわからないわけです。だけれども、逆に言うと、どこかには埋まっていると思える。墓碑がないことによって、よりいっそう、そう思うことができるわけです。お母さんやお父さん、子どもたちはこの辺りに埋葬されているのかななどと思いながら、どこかしらの集団埋葬地に行って、津波1周年、2周年といった折々のときに、祈りを捧げるという形ができあがった。このような弔いの方法は、アチェでは非常に新しいかたちなんですけれども、津波被災という、たくさんの身元不明遺体が出た状態に対して新たに考案されたものと理解できます。

幡谷先生からのご質問ですが、私自身も、紛争が解決したとか、社会の亀裂がなくなったという主張をしたつもりは全くありません。2つの軍事勢力に分かれて、武力的行使が前提になったかたちでの戦争状態が解消したのであって、その社会の亀裂自体は、こんなことで簡単に解消するものではないというのは、もちろんその通りだと思います。ただし、ここで重要なことは、災害を契機に、政治的立場を問わずに、人道上の支援を互いにすることができるということを人々が学んだことです。今も社会的亀裂はありますし、津波の被害を直接受けなかったために、支援がを入らなかった地域では、むしろ開発が遅れたというようなこともあって、地域内の格差が開いてしまった場所もあるんです。そういった課題に対して、アチェの人たちは今、自分たちの手でどのように解消するのか、といったことに取り組んでいます。ある意味で、復興はまだ全然終わっていないわけです。

もう一つ、外からの物差しについてですが、極限状態にある地域、特に被災地や紛争地に外から人が入って何かするというときに、外から来た人たちが自分の物差しを当然視してはいけないということは、ある種の常識だと思うんですが、ではどこの物差しにあわせればよいかと言ったときに、現地社会の文化がそのまま正しい基準であるということには必ずしもならないわけです。特にアチェの場合は、アチェ社会自体が被災前から紛争状態にあって、一体何が現地の文化かということさえも一つに定められないような状況のなかで、皆さんそれぞれ支援をしている。だから、初期の段階で、何か行動を開始するにあたっては、何等かの物差しがなければ動けないので、みんなそれぞれの自分の物差しを持ってとにかく行動する。大切なのは、行動したあとの相手の反応をどうフィードバックできるかで、その力こそが問われていたように思います。地元の人の反応がうまく理解できないときに、文化の違いといった言葉で片付けて、それ以上理解することを諦めるのではなくて、いろんな情報を集めて、目の前にいる人々はこういうつもりなのかな、こんなことを考えているのかな、と推し量り続けようよ、という願いをもって、今日はお話させていただきました。

王柳蘭（白眉センター、地域研）：

私の関心のなかで正義を考えてみたいと思います。移民問題は、多文化主義、人権、国際関係、法学といったものが非常に密接に関係しています。日本でも、多文化共生という上からの政策などで、

移民をめぐる、当事者から政府までを含めて様々な角度から論じられましたが、私自身はそれに対して満足のいかない面がありました。私の事例でいえば、タイに住む中国系ムスリム、すなわち複数の文化を背負った人々は複数の暦で生活リズムを打っていますので、イスラーム的な暦の時間にそった文化—生態的なリズムのみならずえ、タイや中国的など、様々なリズムのなかで彼らは生きています。その複数のリズムが文化と結びつきながら体のなかで打っている。研究してはじめて気がつきましたが、これは非常に豊かなことです。特に興味深いことは、お互いのリズムが毎回毎回対立しているのではなく、特定のリズムのときに、そこに皆、同調していくのを見ることができることです。私自身はムスリムではないので、イスラームという、過激とか、すごく狭い範囲での規律を言っているといった思い込みが研究前にはあったのですが、調査をはじめて彼らのリズムのなかに入っていくと、自分も彼らと一緒にご飯を食べたりすることで彼らのリズムに同調していく瞬間が、年に何回かありました。こうしたことに着目するだけでも、正義とか正義ではないとかという議論を越えたものが、見えてくるのではないかと考えています。

星川圭介（地域研）

まず河合先生の、日本から技術援助が必要ではないかという話ですが、日本からの技術援助というのは、実際もう入っています。今ある地方で進んでいる治水計画の大枠は、JICA と現地政府の各機関が関わって作ったもので、JICA が多くの技術的提言を行っています。

次に幡谷先生から、災害に対しての正義というのは、人々の幸福という観点から見て複数の存在しえない、1つになるのではないかというコメントをいただきました。おっしゃるとおりで、私自身正義というキーワードをかぶせてしまったので、ややわかりにくい話になってしまったとは思っています。例えばバンコクを守るために、周囲の住民を犠牲にすることは許されるのかと言え、それは明らかにNOであって、正義ではないわけです。とはいえ現実的には、それが「正義」としてタイ社会のなかでまかり通っていることも事実です。そんなある部分を犠牲にせざるを得ない状況が正義かどうかと言ったら、もちろんそうではない。バンコクの住民も外の住民も等しく水害から逃れて、衛生的な生活を送る権利がある。これが正義であると、私も思います。

今日申し上げたかったことは、そうした理想を巡る対立ではなく、現実問題として、バンコクに影響があるかどうかという科学的見解をめぐる対立があったということです。むしろ土嚢を壊した人々も、理念的な正義というか完全な平等の実現までは求めておらず、もし土嚢を壊せばバンコクのなかに非常に大きな影響が及ぶと思っていれば、おそらく土嚢の破壊までには及ばなかったのではないか、ということです。

帯谷知可（地域研）：

私は、正義というものが非常に声高に主張される国を研究対象としております。しかしいつも、そうした点がとても危ういような気がして、一步引きたくなる思いでフィールドに通っています。そのため、門司先生から、正義をあまり主張しないほうがいいのではないかというコメントがありましたけれども、その点は私も大変共感しております。

総合討論

山本博之（司会、地域研）：

総合討論を始めるにあたって、議論の方向性をはっきりさせるために、3名のコメンテーターからいただいたコメントを私なりの関心から少し整理してみたいと思います。

やや乱雑な言い方になりますが、あえて大胆に翻訳してみると次のようになります。結局のところ、地域研究者は何でもかんでも相対化してしまう。違うものが出てくると、その間を取ってみて、何とか両方が納得するような方法はないですかと尋ねて、折り合いをつけさせて決着を付けさせようとしてばかりいる。でも、それでいいのか。世の中には絶対的な正義があるのではないのか。あれも正義これも正義と、言葉の上で正義だ正義だ

